

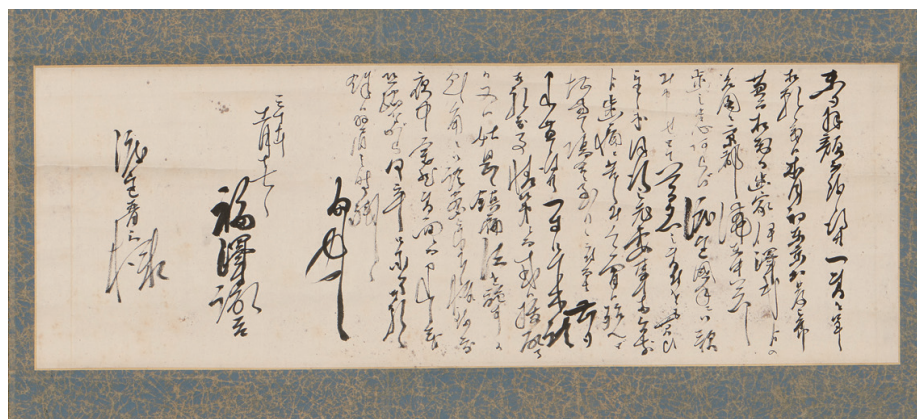
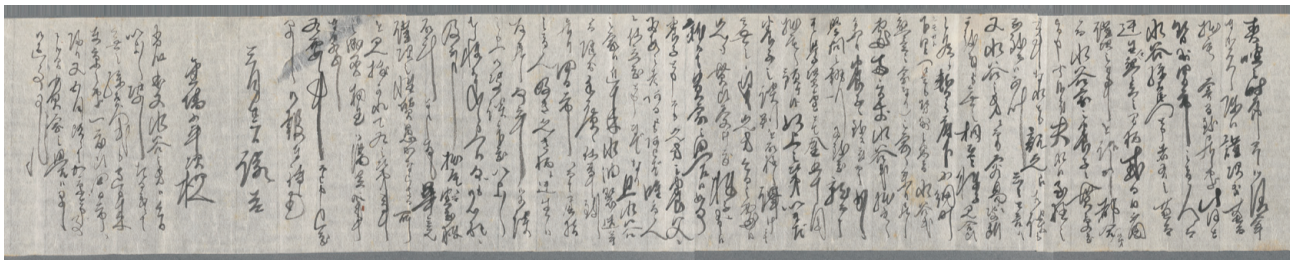
福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第23号 2015年10月31日 発行

目次

*新収福沢論古書簡……………	1	*平成27年度未来先導基金によるプログラム	
*羅英均氏エッセイ……………	2	および中津市アーカイブズ講座……………	7・8・9
*福沢研究センター講座（日吉キャンパス）		*新収資料紹介……………	10
岡野光喜氏・鈴木和男氏……………	3・4・5	*韓国との交流／おもな動き……………	11
*福沢研究センター講座（大阪シティキャンパス）		*センター諸記録（2015年4月～2015年9月）……	12
小室正紀氏……………	6		



福沢研究センター通信第22号および23号で、紹介した福沢論古書簡のうち、2点を掲げる。

上は金場小平次宛 明治20（1887）年3月22日付（22号8頁参照）。神吉和彦氏寄贈資料。

下は渡辺晋三宛 明治30（1897）年11月17日付（本号10頁参照）。渡邊惇子氏寄託資料。



친구들—友達—

韓国梨花女子大学名誉教授 ^な羅 ^{よん}英 ^{ぎゅん}均

朝食をとっていると、電話が鳴った。「もしもし」の活気に溢れた声の主は、島保子さんだ。「今日の朝刊の記事を見たわよ」「あら、もう載ったの？記者さんが来週ソウルに来る時に新聞を渡してくれるというから、私はまだ見てないのよ」。朝日新聞に載った私のインタビュー（2015年7月22日付「知日派の日韓論」）を見て、電話をかけてくれたのだ。

島さんは、国民学校の同窓生である。私は当時‘満州’と呼ばれた中国奉天で生まれ、国民学校を卒業するまでそこに住んだ。加茂小学校という日本人学校に通い、そこを卒業した。島さんはその時のクラスメートだ。

父は、中学教育からは韓国で受けるべきだといって、経営していたゴム工場を閉め、私たちは1941年に引越した。離れ離れになってしまった同窓生たちへの私の切情は、長く続いた。女学校を卒業した後も、大学に入ってから、続いた。太平洋戦争が終わった時、満州を離れ日本に帰る彼女たちの苦労を考えると、胸が痛んだ。北朝鮮に住んでいたある日本人女性が、荷物を持って徒歩で釜山までたどり着き、帰郷船に乗るまでのすさまじい経験談を読んだとき、私はその女性に友人達の姿を重ねた。

ところが連絡が途切れてから62年ぶりに、私は彼女たちと再会することになった。2003年に日本で出版された『日帝時代、わが家は』（みすず書房）がきっかけとなったのだ。島根県周南市でお店をやっていた同窓生の松田藤枝さんが、ある日新聞を見ていたら、書評欄の羅英均という名前が目に飛び込んで来た。‘これ英ちゃんじゃないの’と覗いてみたが、そこに載った写真には、昔の面影はほとんどなかった。それでも訝しく感じた彼女は、横浜に住んでいる島さんに連絡した。島さんはすぐにみすず書房に電話をかけて、私の住所と電話番号を手に入れ、連絡をくれたのである。

その電話に出たとき、私は本の出版がくれた意外な結果に、驚きとともに胸いっぱいの感謝を感じずにはい

られなかった。同窓生たちは、小田原で開かれる同窓会に私を招待してくれた。その時から、私たちはお互いに連絡を取り合うようになり、現在まで続いている。

その翌年、島保子さん、平山恵美子さん、黒田恵子さん、野崎益子さん、大塚時子さんが韓国に来てくれた。時子さんが‘ヨン様（ペ・ヨンジュン）’の熱烈なファンだったので、私たちは彼が出た‘冬のソナタ’の撮影場所である春川に行くことにした。時子さんはいまだ独身であったが、そのせいか少女のように純粋な性格だった。中心街にある等身大の‘ヨン様’肖像の隣に立って写真を撮るときの時子さんは、まるで新郎の隣に立った新婦のように、はにかんで微笑んでいた。時子さんのその姿を見て、私たちは春川に行ってよかったと思った。さらにその3か月後、時子さんがこの世を去ったと聞いた時、私たちは彼女の素朴な願いを聞き入れてあげたことを、尚更幸いに思った。

島さんは、その後も2回韓国に来て一緒にお寺を巡礼した。忠清南北道、慶尙南北道、全羅南北道、江原道の名山と古刹を回った。おかげで私は、今まで自分の国について知らなかった事についても、新しく習うことができた。また、私たち夫婦が日本に行く度に日本各地を案内してくれて、そのおかげで私たちは青森から鹿児島まで、日本をまんべんなく見物することができた。島さんは明哲な頭脳の持ち主で、彼女の地理的知識、組織力、行動力は驚く程のものだ。現在彼女は、ご自分が通うお寺の信者の会関係の仕事をしていると聞いているが、彼女の能力はそれ以上の仕事でもいくらかでも消化できるように思える。

私の同窓生たちへの心情は、国の差異だの、国境だの、外交関係のようなものとは全く関係ない。ただ会うと嬉しく、一緒にいると楽しく、しばらく会ってないと会いたくて気になるだけである。これは私の人生の中で、数少ない大切な気持ちの一つだと思われる。

（原文は韓国語。翻訳 姜兌珩。羅氏の紹介文は p.4 を参照）

福沢諭吉のことばに学ぶ

～学問のすすめとその思い～

スルガ銀行 社長・CEO 岡 野 光 喜

今日は、福沢諭吉が『学問のすすめ』のことばに込めた想いを、私たちはどう受け止めるべきかについて考えたい。福沢は今から180年前、1835年1月10日大坂に生まれた。同時代の人物には、近藤勇や岩崎弥太郎、坂本龍馬らがいる。彼は前半生を幕藩体制下で生き、後半生を新たな中央集権体制下で生きることになった。この大きな変動の中で、彼は欧米へ赴く機会を得た。当時江戸は人口がロンドンよりも多い大都市ではあったが、アメリカはゴールドラッシュが起こり、2度目の渡米時には大陸横断鉄道の建設も始まっていた。またヨーロッパは万国博覧会興盛の時代で、文明に勢いがあった。その欧米を見聞した福沢は、『学問のすすめ』を著した。全17編で、最終的には340万部が売れた。当時の日本人口は3408万人で、10人に1人が読んだ計算になる。

『学問のすすめ』が言わんとするところは、一人ひとりが「独立の気概」を持つことである。個人の独立が国としての“国格”につながるのである。だが日本の現状を顧みて、どうであろうか。一身独立して、一国独立する。まずは「個人」の依頼心を取り除くことから始めよう。そして「一身の独立」とは自由であること、しかし「我儘」とは違う。

自由にやるが、他を妨げてはいけぬ。他を貶めて自ら奪うのはナンセンスである。社会のマイナスとなる行為は厳に慎もう。

彼は「官を慕い官を頼み、官を恐れ官に諂い、毫も独立の丹心を発露する者なくして、その醜体見るに忍びざることなり」と述べた。すなわち、民の力なくして国は成り立たない。「民」の力を重視した結果として、多くの民間企業を構想し創設した（横浜正金銀行、東京海上保険、交詢社、明治生命、時事新報など）。また彼がよく用いた「三十一谷人」の落款は「世俗」を分解したものであり、自分は「世俗」に生きるということを公言し、それを実践した。「俗」すなわち「民」の立場で、何のしがらみもなく、無位無官を通して世俗にて「独立」した存在でい

ようとする福沢諭吉の生き方を表している。

『学問のすすめ』からいくつかのことばを挙げ、そこに込められた想いを考えたい。まず初編にある「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとによりて出来るものなり」。なぜ学ぶのか、国家の発展、独立自尊のために新しい学問、実学を身につけることが大切なのである。「独立の気力なき者は、必ず人に依頼す。依頼する者は、必ず人を恐る。人を恐る者は、必ず人に諂うものなり。(中略)まず自己の独立を謀り、余力あらば他人の独立を助け成すべし」(3編)。すなわち正しいことを主張し、孤立を恐れるな、周りの空気に合わせて、人の顔色ばかりうかがっていると、卑屈な行いを重ね、よからぬ事態を招くことになる。義務を果たし、余力をもって、人助けを行うというのが人の筋であろう。「進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む」(5編)。決して後ろを振り向かず、前だけを見て歩んでいける人間の前には、必ず明るい未来が開ける。諦めず進もうと努力している人は、必ず前進していく。「蟻の門人となるなかれ」(9編)。働いて死ぬだけの蟻のような一生を送ってはいけぬ。未来にたすきを繋ぐ自分になれ。自分だけの幸せを考えるのではなく、未来を担う子供たちのために、今を生きる私たちがよりよい社会をつくっていかなくてはならない。「言葉をもって述べればこれを了解すること易くして、人を感じしめるものあり」(12編)。人前で話せるようにならなくてはならない。自分の主張したいことやメッセージを的確に伝えるために、弁舌が上達するよう勉強しなくてはならない。「信用こそ人生の第一義かりそめにも人に当てにせられる人にあらざれば、なんの用にも立たぬものなり」(17編)。自分の長所をアピールできる人間になれ。自分の本当の価値は黙っていてもわかってもらえないのでどんどんアピールせよ、自分で自分を盛り上げることで活力になる。

「顔色容貌の活発愉快なるは、人の徳義の一箇条にして、人間交際において最も大切なものなり」(17編)。

上機嫌は、社会的なマナーと心得よ。機嫌よく笑顔で接すれば、笑顔が返ってくる。人と人が接するところが発展があるのだから、笑顔で門戸を開き、会話することが重要である。「人に交はらんとするには、ただ旧友を忘れざるのみならず、兼ねてまた新友を求めざるべからず」(17編)。交友関係はできるだけ広くして、ひとつの分野にかたよらないことが大切である。

続けて『福翁自伝』『文明論之概略』からも取り上げたい。「朱に交わりて赤くならず」「莫逆の友なし」。彼は朱に交わっても赤くならないタイプで、親友という友を持たなかった。そのことによって、自分の独立が保たれる。「古来文明の進歩、その初は皆所謂異端妄説に起こらざるものなし」「昔年の異端妄説は今世の通説なり、昨日の奇説は今日の常談なるべし」。すなわち「異端」とは、常識や既成の枠組みに捉われない主張、行動であり、「イノベーション」とは、社会や時代の最先端を切り拓く気概、能力である。Innovationとは「技術革新」ではなく「革新的価値創造」で、今あるものと今あるものを組み合わせて、従来にない新しい価値を生み出すことで

あり、技術に限った話ではない。「失敗」の反対は、「成功」ではなく「挑戦」である。

最後に、慶應義塾で学んでいるみなさんに伝えたい。「慶應」とは「慶雲應輝」、慶雲(めでたい時に現れる五色の雲)應(まさ)に輝くべしに由来する。また「慶應義塾の目的」で福沢は次のように述べている。「慶應義塾は単に一所の学塾として自から甘んずるを得ず、其目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し(後略)」、すなわち、ただ学問を教える学校ではなく、社会のリーダーにふさわしい人格を持つ人を輩出するのが慶應義塾である。

最後に私からのメッセージは「破境者たれ」ということである。それは従来の枠組みを超えた新世界への挑戦である。「常識」を再考し、「慣習」を疑い、「規則」を改める。これが、「進歩」を引き出す。新しい発想と行動で慣習の境を破壊する『破境者』になって欲しい。(本稿は2015年7月6日に行われた福沢研究センター設置講座『近代日本と福沢諭吉 I』の概要である。)

羅英均先生について

西沢直子

羅英均先生は1929年に奉天(現瀋陽)でお生まれになり、文中にもあるように小学校卒業後、ご家族で朝鮮に戻られた。「韓国近代文学の祖」と称される李光洙に英語の手ほどきを受けられ、のちに英文学を専攻されて、母校梨花女子大学の教員となられた。

先生のご尊父羅景錫氏は、京畿道水原の裕福な家庭に生まれ、1910年に早稲田大学に留学、滞在中に大杉栄を知り、帰国後は抗日運動にも参加された。その妹、すなわち先生の叔母様は、朝鮮洋画家の草分けであり、また「新しい女」として注目された羅惠錫氏である。

筆者は、先生が日帝時代、そして朝鮮戦争下のご自身とご家族の体験についてお書きになった『日帝時代、わが家は』を拝読し、本の中で紹介されていた父羅景錫氏の「婦人解放論」に強い関心を抱いた。同氏は「人が求める自然な家庭」は「愛情があふれ和気藹々」であるべきで、「その根本となる男女の間に愛情、尊敬、理解が不可欠で、この三つがそろわなければ、男女が思慕することを恋愛とは呼べない。家庭の根本は恋愛に置くべきである」と主張された。「愛情、尊敬、理解」は、まさに福沢諭吉

が主張する「愛」「敬」「恕」ではないかと考えた筆者は、羅景錫氏についてお尋ねすべく、不躰にもみず書房宛に伝言を託した。先生はすぐに、見ず知らずの一読者に丁寧なお返事をくださり、そこから先生との交流が始まったのである。

本年3月6日には、服部禮次郎記念基金による国際交流の一環として、三田演説館でのご講演をお願いした。先生は「日韓のはざまで」というタイトルで、文中にも登場する島さんたちが「褒めすぎよ」とおっしゃるくらい、日本人のモラルの高さや読書好きな点など、日本のよい点を挙げてくださった。同時に、羅景錫氏世代が痛感した苦しみ、無念さについても語ってくださった。特に言葉を奪われた苦しみについて、どれほど心を傷つけるものであったのかを静かな言葉で伝えてくださった。

先生はいつもお互いに理解し、交流することの大切さを教えてくださる。微力ながら福沢研究センターでも、このような企画を続けていきたい。

*羅英均先生近著『わたしが生きてきた世の中』言叢社
(羅英均先生のエッセイを p.2 に掲載)

三田からガダルカナルへ — 鈴木和男氏（昭14 政卒）講演 —

鈴木氏は大正5（1916）年生まれ、幼稚舎から慶應義塾で学び法学部政治学科を昭和14（1939）年に卒業。株式会社オカモト取締役会長。講演当時98歳。講演では陸軍での経験、特に中国、香港、スマトラ島、ガダルカナル島などでの貴重な戦争体験を中心に語っていただいた。

（要約作成：横山寛）

義塾卒業から陸軍へ

第一次世界大戦中の大正5年に東京で生まれた。関東大震災の起こる大正12年に、義理の兄のすすめで幼稚舎に入学した。それから普通部、大学予科を経て昭和14年に法学部政治学科を卒業した。最近の政治学科は優秀な生徒が入るけれど、その頃は落ちこちていくものをなんとか支えるところだった。

大学を卒業した翌年の2月に召集された。それで心のゆとりもないまま名古屋第三師団管轄下の浜松高射砲第一聯隊に入隊した。約6ヶ月の初年兵教育を終えると幹部候補生として、名古屋城内に置かれた第三師団で教育を受けた。南京虫の湧くいやな場所だった。初年兵時代には乾いたアンパンを涙ながらかじったこともあったし、給仕のときにはご飯が乾いてただけで上官に殴られた。いいこともあれば悪いこともあった。

それから甲種幹部候補生となって中野の経理学校で学んだのち、見習士官として名古屋第三師団へ戻ると、そこで第三十八師団付を命ぜられ、昭和16年9月に南支・仏山へ派遣された。

太平洋戦争の始まり

仏山で師団経理部員として勤務していたが、12月に入ると師団は行動を起こし、深圳へ移動した。そして12月8日、真珠湾攻撃にあわせて香港へ攻め入った。この戦いでは500人以上が戦死した。当地では小池礼三氏（ロサンゼルスとベルリンのオリンピックでメダルを獲った義塾出身の水泳選手）などと交流があり、香港島へ泳いで渡るといった計画もあったが、実際には実行されなかった。その後攻略した香港島ではクリスマスのため食料がたくさんあり、主計の自分は食事の世話をしなければならなかったのが助かった。

年が明けて1月になると師団はスマトラ中南部攻略のためシンガポール方面へ出発し、翌月スマトラ島南部のパレンバンに到着した。スマトラ南部には照井伊豆氏（慶應義塾体育会主事）が第一師団の一員として来ていたので三田会を開いたりした。5月には北スマトラのタルトンに移ったが、その後戦局が変化してラバウルへの転進命令が下されると、10月にメダンを出発し2週間かけて同地に辿りついた。その目的はソロモン諸島方面攻略のためであった。

ガダルカナル島にて

昭和17年8月から一木支隊、川口支隊、青葉支隊、第二師団と続いたガダルカナル島への攻撃は失敗。11月になると私のいる第三十八師団にその出番が回ってきた。しかしラバウルを出発した船団は敵機の空襲を受けた。自分の乗っていた「ありぞ丸」も被弾、何とか駆逐艦に助けられてブーゲンビル島に帰還した。そのあとで、食糧不足に苦しむガダルカナル島へ経理部員を補充することになり、私は12月末に伊号第三十一潜水艦で同島への上陸を果たした。懐中電灯で先を照らして歩くと足元でごろっとしたものがあたる。それはしゃれこうべだった。10メートルも行くともたしゃれこうべがある。最初は一つ一つ手を合わせていたが、すぐにやめた。ガダルカナル島は暑いので三日もすれば骸骨になってしまう。自分もこうなるのかと思った。

主計は物を供給する役目だったが、島には食料が何もない。だからネズミやヤシの実を調達していた。皮は繊維で加工でき、実は美味しいヤシの実のおかげで生き残れたと思っている。ヤシを集めて兵隊に配ったが、ひとりで勝手にとりに行き機関銃にやられた兵士もいた。やがて段々補給がきかなくなり、周りでも餓死者が出てきた。人肉食の噂もあった。兵士が「主計殿」といって何か肉を持ってきてくれることがあった。ネズミか人肉かわからないが、ネズミだと思っている。

後退の命令が大本営からくると、それは歩行可能者のみ撤退ということだった。昭和18年2月1日に島北部エスペランスで駆逐艦に收容され、ブーゲンビル島に撤退した。乗船地では我先にと乗込む兵士たちの姿があった。危篤だった病人も走り出した。自分は力が残ってなくて船に這い上がれず、上から引っ張りあげられてようやく乗れたが、人間は最後は自分のことだけで他人のことには目が向けられない現実をありありと見た。

戦争がおわって

31歳で復員し、なぜこんな無駄なことをしたのだろうかと考えた。地図を写すという作業ひとつをとってみても日本はトレースしていたが、アメリカはコピーしていた。レーダーなどアメリカの機械力は優れていた。一方で日本人は県人会など小さいところにこだわる。戦争の様々な局面でも明らかになる、こうした日本人の持っている性質をよく見つめなければならないと感じている。

（本稿は2015年6月22日に行われた福沢研究センター設置講座『近代日本と福沢諭吉Ⅰ』の概要である。）

幕末・維新期の「実学」思想

—『学問のすすめ』前史—

名誉教授 小室正紀

福沢諭吉の思想の根幹に「実学」の主張があり、それはつまるところ近代科学を唱えたものだということは、今では、かなり広く知られている。福沢自身が「実学」に「サイヤンス」とルビを振っていたことも、福沢に関心を持つ者なら周知の所だろう。その福沢の主張は、権威のある説であっても、それに疑問を持ち、実証に基づいて論理的に考え、相互に議論を闘わせながら、次第に真理に近づいて行こうという考え方である。

福沢は、このような考え方を何故抱くようになったのだろうか。大阪シティキャンパスの講義では、この点を考えてみた。

まず思いつくのは、欧米の書物から学んだからという理由だろう。福沢は十九歳から、緒方洪庵の適塾などで、オランダ語の自然科学書を読むことに没頭していたから、そこからの影響は勿論ある。しかし、当時の清国でも欧米の書物は読まれていた。別の理由として、日本では特に18世紀後半から蘭学が研究され、前野良沢や杉田玄白が『蘭学事始』を翻訳するなど、福沢の時までに百年以上の伝統があった事が挙げられる。しかし、この点でも、清国では日本より早くから、はるかに大規模に西洋科学が宣教師によって教えられており、伝統は日本だけのものではない。

そこで、考えなければならないのが、儒学である。前近代の東アジアでは、学問・教養・思想が圧倒的に儒学に影響されていた。このため、科学的な精神が社会に拡がるには、儒学がどう変わったかが鍵となる。福沢も十九歳までは儒学しか知らなかった。その福沢が学んでいた儒学が、どれだけ近代科学に開かれたものとなっていたかを考えて見るべきだろう。

この観点から、三浦梅園(1723～1789)、海保青陵(1755～1817)、帆足万里(1778～1852)、佐久間象山(1811～1864)という4人の儒者を取り上げて、かれらの儒学が蘭学の影響でどのように変わってきたかを検討した。

三浦梅園は、福沢の育った中津藩に近い豊後杵築藩の村医で儒者だった。福沢の祖父も梅園に就いて学んでいる。梅園は親友の蘭学天文学者麻田剛友から西洋自然科学の知識を得て、宇宙天文を観察し既存の説に囚われないで、その数理的な法則性をつかみ、それを儒学に組み込もうとした。ただし梅園の場合には、一人の学者が、

そのような方法で深く考えれば、一気に宇宙の真理を把握できると考えており、その点では科学的というよりは哲学的であった。

海保青陵は、丹後宮津藩の家老で儒者の父に教育され、その後は経世家として自由に生きた経世家だが、少年時代に蘭方医桂川家で、後に『解体新書』翻訳メンバーの一人と成る桂川甫周と一緒に育った。そこで蘭学の影響を受け、疑う事、客観的に見る事、数的に把握すること、法則性を究明することを、自分の儒学のあり方とした。しかし、儒学が間違っていると考えたわけではなく、蘭学に影響された科学的な思考で儒学を再解釈しようとしたのが青陵であった。

帆足万里は、豊後日出藩の家老でもあった儒者で、三浦梅園の孫弟子でもあった。福沢の父の師でもあり、諭吉世代の中津藩士も万里の説に傾倒するものが多く、諭吉の兄も万里の影響を受けていた。万里も蘭学に関心を持ち、オランダ語を独習していた。彼も自然・事物を把握するために数学と実証を重視していた点では梅園と変わらない。しかし、儒学は重視していたものの、必ずしも儒書に真理が書かれているとは考えず、真理は哲学的な洞察で一気に到達できるものではなく、一步一步人間がそれに向かって進んで行くものと考えていた。自然科学を取り込むことで儒学を補強しようとした万里であったが、そのことで儒学を解体させ始めていたと言える。

信州松代藩士の佐久間象山は、朱子学者であると同時に三十代から蘭学も学んでいた。1850年には中津藩士14名が西洋砲術を学ぶために藩命で象山の塾に入門しており、同藩にも影響を与えた。象山は、科学に関しては西洋の優越を認め、西洋の実証科学を吸収しようとしていた。また福沢と同じように広汎な国民に知識が必要とも考えていた。しかし、「東洋道徳、西洋芸術」という彼の言葉が示すように実証科学により朱子学を補強することが出来るとも考えていた。

このように、江戸時代の間に、儒学は蘭学の影響を受け、次第次第に其の姿を変え、崩壊の一手手前まで来ていたのである。この流れの先で、科学・「実学」の発展を人間社会の根本的な変革に結びつけた所に福沢諭吉の思想の画期的な所があったのである。

(本稿は慶應大阪シティキャンパスで2015年3月21日に行われた福沢研究センター講座の概要である。)

平成27年度 未来先導基金によるプログラム および 中津市アーカイブズ講座

本年度より未来先導基金によるプログラムの内容が変わり、『福翁自伝』からのメッセージ—義塾のアイデンティティーに遡る道—と題して、大阪・中津の史跡見学と『福翁自伝』の読書会、さらに中津市との提携によるアーカイブズ講座「初級者の部」(高校生と大学1、2年生を主な対象とする)を加えた、豊富な内容となった。日程は8月6日(木)から8日(土)までの2泊3日で、初日は馬場国博教諭の解説で大阪の関係史跡を見学したのち、京都(ホテル京阪)に宿泊し、夕食後には3つのグループに分かれて、大塚彰教諭の司会で、『福翁自伝』の読後感想や疑問点について話し合った。

2日目は中津に移動し、解説付きで「朱華」の郷土料理を味わった後、福沢旧邸・福沢記念館の見学を行い、中津市立小幡記念図書館で結城大佑教諭を講師に、古文書の解説方法に関する講座を行った。宿泊先のグランプラザ中津では、前日と同じ3つのグループに分かれて、末木孝典教諭の司会で再び『福翁自伝』について話し合い、『福翁自伝』からどのようなメッセージを受け取るかについて、最後にグループごとに発表を行った。

最終日朝は、福沢家の菩提寺であった明蓮寺を訪れた。古文書講座2日目は、前日と同じ小幡記念図書館で、資料保存や修復の専門家である尾立和則先生(元京都造形芸術大学教授)から、襖の下張り文書の剥がし方や整理方法について講義を受けた。2グループに分かれ、先生の講義を受けていないグループは、結城教諭の指導のもと古文書解説の実習を行った。図書館での講座修了後は耶馬溪に向かい、福沢ゆかりの競秀峰や羅漢寺を見学した後、帰路についた。

参加者は、高校生8名(慶應義塾高4、志木高2、女子高2)、学部生9名(文学部1、経済学部1、法学部5、理工学部1、看護医療学部1)、大学院生1名。なお古文書講座には、中津の東九州龍谷高校の生徒2名が参加してくれたので、交流を深めることができた。

引率は大塚彰(志木高)、末木孝典(慶應義塾高)、西沢直子(福沢研究センター)、馬場国博(SFC)、松岡李奈(福沢研究センター)、結城大佑(女子高)。



<未来先導基金プログラム 詳細>

8月6日 8:00 東京駅発 のぞみ207号
10:33 新大阪駅着

【福沢論吉関係史跡の見学①】

慶應大阪シティキャンパス・龍海寺・適塾・除痘館記念資料室・大阪慶應義塾跡・福沢論吉生誕地記念碑・大阪歴史博物館

16:30 大阪発(貸し切りバス)
17:30 京都着
19:30~21:30 『福翁自伝』読書会

8月7日 8:30 京都駅発 のぞみ3号
10:58 小倉駅着
11:09 小倉駅発 ソニック15号
11:42 中津駅着

【福沢論吉関係史跡の見学②】

増田宋太郎生誕地・福沢論吉旧邸および福沢記念館・中津市学校の門(生田門)

14:30~16:30 中津市立小幡記念図書館
古文書講座 50分×2回

【福沢論吉関係史跡の見学③】

村上医家史料館

19:30~21:30 『福翁自伝』読書会

8月8日

【福沢論吉関係史跡の見学④】

明蓮寺・中津城「独立自尊」記念碑

9:00~11:00 中津市立小幡記念図書館
尾立和則先生講義・古文書講座

【福沢論吉関係史跡の見学⑤】

耶馬溪・競秀峰・羅漢寺

16:30 北九州空港発 JAL376便
羽田空港到着後解散

未来先導基金によるプログラムに引き続き、アーカイブズ講座「中級者の部」が、例年同様別府大学や九州大学などの学生・大学院生等と合流して、8月8日(土)から12日(水)までの4泊5日間の日程で行われた。アーカイブズ講座の開催は、今年で7年目になる。

福沢研究センターよりTAとして参加した調査員は以下の通り。大庭裕介・星野高德・堀和孝・横山寛。

アーカイブズ講座

＜中津市アーカイブズ講座 中級者の部 詳細＞

- 8月8日 13:30 開講式 中津小幡記念図書館
中津市教育長・別府大学アーカイブズセンター長挨拶・参加教員紹介
- 14:00 講義①「福沢諭吉と中津」西沢直子
- 15:15 講義②「文書整理と目録編成」
針谷武志先生（別府大学）
- 19:00 講義③「福沢諭吉を巡る“資料”―
歴史研究と資料について考える―」
都倉武之
- 8月9日 9:00 講義④「襖の下張り文書」
尾立和則先生
- 10:45 福沢旧邸・福沢記念館見学
- 13:30 整理・目録作成実習
- 8月10日 9:00 整理・目録作成実習
- 18:30 学生親睦会
- 8月11日 9:00 整理・目録作成実習
- 19:00 実習中間発表
- 8月12日 9:00 整理・目録作成実習
- 12:15 閉講式 中津市教育長挨拶

今年度の目録作成は、すでに襖から剥がされ中津市

歴史民俗資料館
に保存されてい
た森家の文書を
扱った。文書に
ある「堀川町」
を頼りに、幕末
期の「中津城下



絵図」を探すと、「森洋平」の名前が確認される。また中津市で大分県公文書館所蔵の過去の県職員録等を調査したところ、明治12年以降、八等属、土木課七等属、県会御用掛などに「森弘」の名前があった。

下張り文書を剥がす作業は、中津市永添の横井家が平成26年8月に解体される際に、中津市が寄贈を受けた襖を扱った。横井家は、奥平家の前に中津の藩主であった小笠原家に代々仕えており、藩主が奥平家に代わった際に、永添村に移住して医業を始めたといわれる。

■ 参加記

A グループ（福井一玄、山本啓太、森田美帆、中野綾香、中島勇太郎、桜間慎乃）

独立自尊、半学半教。幕末から明治という変革の時代を駆け抜け、日本の学問・政治、そして人間の在り方に

さえも影響を与えた福沢諭吉とはどのような人物なのか。福翁自伝を読む前の我々にとって、福沢とは、秀でた才能に恵まれた雲の上の偉人であった。しかし、福翁自伝読了後、班員が口を揃えて言ったことは、福沢は大変人間味に溢れた人だということである。喧嘩もすれば酒も飲む。気の置けない友人達と共にいたずらもする。我々学生と同じように日常を歩みながらも、学問に打ち込み、前進していく福沢は、我々にとっての「尊敬する先輩」という身近な存在へと変化していった。

しかしながら、福翁自伝の読了・議論だけが福沢に対する見方の変化を促したのではない。それは、我々が自らの足で適塾を訪れ、福沢が仲間と切磋琢磨しながら夢中に学問に励んだ場に足を踏み入れたこと、福沢が育った旧邸でその当時の様子・福沢と家族の関係性を想起したこと、そして古文書講座等で歴史の流れ・世界観を感じたことが大きな要因となったと思う。実際、大阪・中津を訪れ、班内で福翁自伝に関する議論が進むに連れて、福翁自伝に記載されているエピソードの議論のみならず、「福翁自伝は何を目的として誰に対して書かれたものなのか」という自伝執筆の意図や、福沢の性格等、より深い段階の議論へと進むことが出来た。

班の結論として、福翁自伝においては福沢の成年期に関する記載よりも青年期に起こった出来事・感じたことへの言及が多いことから、福翁自伝は次世代を担う若者達に向けた言葉であると考えに至った。福沢は、我々若者に対して、愚直に学問・物事に取り組み、時には羽を伸ばして人間としての器を広げながらも、信念を持って新しい道を開拓していくことの大切さを伝えたかったのかもしれない。

今回の旅を締め括るにあたって、A 班では福沢諭吉の生涯を表す言葉を考えた。以下、それを引用する。

ふ：不幸を糧にし

く：苦勞にめげず

ざ：挫折を乗り越え

わ：我が道をゆく

ゆ：揺るがぬ信念を持ち

き：既成観念に囚われない

ち：智恵と徳の人

決して恵まれているとは言えない環境で育ちながらも、努力によって運を味方につけ、自分の信念によって道を作り出していった福沢諭吉という人物が、我々の在学する慶應義塾大学の創始者であることを誇りに思う。

（文責：中野綾香）

B グループ (斯波凜、関根礼人、吉田朝、三宅貴大、 仁科慎也、本田紘規)

「封建の世に巻き込まれ、家族の助けに支えられ、中津に生まれた福沢の、一身独立ここにあり」。これは私たちの班が考えた本講座の総括である。私たちは最初、「福翁自伝」から福沢のイメージを膨らませていたが、自伝の書かれた内容に少し誤りがあるのに気付いた。借金勘定の矛盾や徹底した封建的な中津批判がそれで、事実「中津留別の書」では福沢が中津を愛していることが読み取れ、自伝の内容と食い違っている。では、なぜあえて事実とは違うことをちりばめているのかを班内で議論して、福沢がこの自伝を通して一身独立の重要性を伝えなかったのではないかと結論を出した。借金のように経済面で人に頼るな、いつまでも精神面で門閥制度の旧習に拘泥するな。自伝の出版された当時、日本の危機を脱するために一番必要だと福沢が考えたこの二面から成る一身独立を強調するために、わざと事実とは異なることを書いたのかもしれない。

また、今回訪れた中津と福沢の関係を考えたとき、中津であったからこそ福沢の思想が形成されたと考えた。というのは、福沢が蘭学の学ぶきっかけとなる長崎が中津の近くにあり、言葉は悪いが近くに何も無い辺鄙な田舎ではなかったというのが大きかったと思うからである。その長崎遊学について考えると、そこには兄の影響がある。兄とともに長崎に向かい、その後も大阪修行などで兄は論吉を助ける。これは兄に限ったことではなく、父は論吉を坊主にさせて門閥社会から守ろうとし、母は家財を売って論吉の大阪行きを支えた。こうした家族の支えがあったからこそ福沢を形作ったと思う。また、班内で、なぜ論吉と兄は同じような境遇を過ごしたはずなのに考え方は全く違っているのかという疑問が出た。10歳近く違う年のせいもあるが、父亡き後、一家の長として兄は封建社会に組み込まれていったことが一番の要因だと推測する。末子である論吉は、比較的それに縛られずに済んだ。これらのことは想像の域を出ないが、福沢家が封建の世に苦しんだのは確かであり、そうした社会のなかで福沢は家族に支えられて思想を形成していった。そうした思いを込めて、上記の様に私たちの班は総括した。

このような学生や教師、福沢研究センターの方々との交流や大阪・中津の史跡巡りの貴重な体験ができたことに班を代表して感謝したいと思う。(文責：仁科慎也)

C グループ (田島義家、乙幡ゆう、石田磨美、白石大輝、 青木理佳、室伏裕太)

この旅への参加は今回で2回目であった。一度歩んだ道を辿ることが多い旅ではあったが、初参加の時とは異なり、『福翁自伝』の勉強会を含んでいる点、また別の楽しみがあった。

1日目の勉強会では、主に大阪修行時代の福沢について感想を出し合った。よく指摘されたのが、適塾時代の福沢が不潔でいたずら好きであった事と、啓蒙思想家としてのイメージが乖離している点であり、自伝を初めて読んだ多くの参加者が意外に感じているようだった。そして、適塾の奔放な塾風は、大阪の気さくな町人気質が作っているのではないかと、との意見もあった。

2日目は、前日を踏まえて中津と福沢について話し合った。学問が盛んな中津の風土が少なからず福沢を学問へ向けさせ、中津市学校創設に携わるなど、中津を大切にしていた一方、自伝で中津を酷評しているのはなぜか。実は本当に嫌いだったのではないかと、封建色が強い中津と、自由な大阪との対比を強調したかったのではないかと。様々な解釈があるが、中津を出たことで、長崎や大阪で最高の師や友人と出会い、見える世界が広がったことは確かである。

私の班では、福沢は自伝で、周囲に同調せずに我が道を歩むことや、人脈を作ることの大切さを説こうとしたのではないかと一応の結論に到達した。進行役を任せられ、上手く話を進められるか不安ではあったが、思い思いの意見が飛び交い、自分が思いつかない解釈にも触れ、大変有意義な時間となった。勉強会の予習の為に5年ぶりくらいに『福翁自伝』を繙いたが、時を置いてまた読むと、初めて読むような新鮮さがあり、淡々とした文章も読者を飽きさせない。中でも、「緒方の塾風」と「大阪修行」の部分は私のお気に入りであり、もし「唯六かしければ(難しければ)面白い」という心境で学んだ福沢らと共に適塾で過ごしていたら、自分ももっと学問好きになれたのだろうか、などと想像してしまう。若い福沢たちが小皿を投げた難波橋や熊の解剖をした道修町など、本文に登場する場所を尋ねて感慨に耽り、ますます自伝の世界に入り込めた。

私たちが慶應義塾に居るのには様々な理由があろうが、いかなる理由であれ、私学が創立者の思想を命とし、そこで生活を送る以上は、福沢について学ばねばならない。単に一人で著作を読むだけではなく、旅を通じて本物と出会うことで、好奇心も持続するであろう。3日間でありながら、どっぷりと福沢に浸れるこの旅を、全ての塾生にお勧めしたい。(文責：白石大輝)

❖ 新収資料紹介

平成27年3月から平成27年9月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。(物故者敬称略)

福沢論吉関係資料

今期は『福沢論吉書簡集』(全9巻、岩波書店、2001～2003年)未収録、あるいは同書簡集で未校訂の書簡を入手することができた。以下それらの書簡を中心に紹介したい。なお新資料あるいは校訂後の書簡全文は、『近代日本研究』32巻(2016年2月刊行)に掲載予定である。

■ 中村道太カ宛福沢論吉書簡 明治12、3(1879、80)年カ10月5日 1巻 【購入】

本文では下総長沼村の「小川武平」について紹介し、「早矢仕君」も知っている人物で、「此度のバンク」へ人を集めて加入したいが周旋は容易ではなく、一度「中村様」に会いたいと言ってきたので一書を呈すると、面会を依頼している。尚書では「電信一条」について、「吉川」が留守なので、他の係の者に申し込むつもりで「中上川」に申し付けたところ、彼は「あるいはむずかしい」との考えであった。何はともあれ試みると書かれている。

小川武平は長沼村の農民で、長沼の入会権を巡って周辺村落との訴訟問題が起こった際、『学問のすゝめ』を読んだ小川が福沢に援助を求めたことから、交流がはじまった。「早矢仕君」は丸善の早矢仕有的で、「此度のバンク」は早矢仕と福沢が民間からの出資者集めに奔走していた、横浜正金銀行と思われる。名宛人でもある「中村様」は横浜正金銀行の初代頭取となった中村道太であろう。尚書の「電信一条」は未詳。「吉川」は郵便汽船三菱会社に勤務していた吉川泰二郎、「中上川」は甥の中上川彦次郎と思われる。

前掲『福沢論吉書簡集』未収録の書簡で、大久保利通、江藤新平、大木高任、西郷従道、田中不二麿、小幡篤次郎らの書簡とともに、「維新大家書簡」の題僉がある卷子に貼りこまれていた。

■ 長与専齐宛福沢論吉書簡 明治26(1893)年カ12月1日付 1幅 【購入】

依頼された写真2枚を送付し、本来は「好まざる所」で実を言えば「不愉快」だが、「飯粒」になるので笑って来命に任せるとある。詳細は不明。また演説の草稿を拝読し意見を添えたので、検討してほしいとも述べている。『福沢論吉書簡集』編纂時には原本の所在がわからず、校訂できなかった。今回原本がわかり、内容に大幅な変更はないが、封筒も一緒に書幅として仕立てられていた。消印が「二六年」と判読できるため、『福沢論吉書簡集』では年未詳となっていたが、発信年はほぼ明治26年であると考えられる。

■ 牛場卓蔵宛福沢論吉書簡 明治30(1897)年10月24日付 1扁 【購入】

神戸の同窓会を知らせる電報の東京到着が遅く、返信できなかったことを詫び、同窓諸君へよろしく伝えてくれるよう依頼する。また近年は「養生」を心掛け、毎日欠かさず早起きし塾生等と白金三光町あたりを「一里半一時半」散歩、午後は居合か米搗きを「凡そ一時半」行い、そのため「至極達者」で風邪もひかないと述べている。

この書簡も『福沢論吉書簡集』では校訂がなされておらず、今回原文には尚書があることが判明した。そこには前日広尾の別邸で「園遊会のやうなことを催したが雨で閉めることになり、今日は天気なので来会者も多いだろう、いつも牛場君が東京にいればと話している、といったことが書かれている。この「園遊会のやうなこと」については、同年10月15日付三宅豹三宛書簡に記載がある。

■ 渡辺晋三宛福沢論吉書簡 明治30(1897)年11月17日付 1幅 【渡邊惇子氏寄託】

11月2日から大阪や京都での同窓会出席も兼ねて、家族とともに奈良や広島、岡山など京阪・山陽地方を旅行中、京都からの書簡である。妻錦(きん)に2、3日前から起っていた歯痛が堪えられない程になり、来診を依頼している。他の書簡からも錦は時々歯科に掛かっていたようで、このときも東京出発前に「齒家伊沢氏」から「渡辺国手」を紹介してもらっていた。渡辺晋三は岡山県の出身で、明治8年に歯科医師国家試験に合格し、36年に設立された大日本歯科医会の京都府部長も務めている。

おもな動き

■ 韓国延世大学・梨花女子大学・高麗大学との交流

1. 延世大学史学科 BK21Plus 近代韓国学専門家養成課程

7月22日(水)から30日(木)まで、修士課程在籍の大学院生2名および引率の研究教授1名を迎えて、アーカイブズに関する研修を通じての交流を行った。今回の研修プログラムでは、三田キャンパス内の見学や福沢研究センターの紹介のほかに、23日(木)午前中には金文京京都大学名誉教授(現鶴見大学教授)の講義「福沢諭吉と韓国」、午後には宮内公文書館の見学、24日(金)午後には筑波大学人文社会系中野目徹教授の講義「日本のアーカイブズ」などを実施した。それぞれのプログラムには、福沢研究センターの調査員も参加、宮内公文書館の見学にも調査員8名および教員1名が加わり計12名で、同館学芸員の方々から保存方法、修復などを学んだ。



宮内公文書館の見学

なお金先生は

韓日両言語で、そのほかは通訳を調査員の姜兌琬さん、具知會さんが担当した。

2. 梨花女子大学史学科より研修生の受け入れ

昨年史学研究所と部局間協定を締結した梨花女子大学からは、7月29日(水)から8月6日(木)の間、博士課程在籍者4名が調査実習のため訪れた。同大学からの受け入れは、3度目となる。

3. 高麗大学兪吉濬データベースプロジェクト

8月3日(月)から5日(水)の3日間、高麗大学韓国史学科より崔徳壽教授ほか兪吉濬データベースプロジェクトチーム7名が来訪し、福沢研究センターを中心に慶應義塾が所蔵する兪吉濬関係資料の調査を行った。同大学には義塾最初の留学生である兪吉濬に関する資料や遺品が子孫から寄贈され、その整理作業が始まっているところである。同プロジェクトの成果は、慶應義塾で学んだ朝鮮留学生に関する調査にも、大いに寄与することが期待される。

■ センター公開講座

日吉キャンパスで開講している設置講座「近代日本と福沢諭吉Ⅰ」では、今年度もゲストスピーカーをお招きして公開講座を開催、塾員の鈴木和男氏(6月22日)、

名誉教授の小室正紀氏(6月29日)、スルガ銀行社長の岡野光喜氏(7月6日)、清家塾長(7月13日)に特別講義をお願いした(詳細はp.3～5を参照)。

■ 「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト

今年度で3回目となる戦争プロジェクトによる展示「慶應義塾の昭和二十年」が6月1日(月)～8月6日(木)に2会場で開催された。会期がオープンキャンパスと重なったこともあり、一万人を超える来場者数となった。今後は資料のデータベース化、調査報告書をまとめていく予定である。詳細は次号に掲載予定。

■ 展示協力

第2回全国大学史展:「学生たちの戦前・戦中・戦後」(7月3日～8月2日)に資料を貸し出すとともに、当番員を派遣した。また、地方で開催された下記の展覧会に協力、資料を貸し出した。

- ・「長野県民の1945—疎開・動員体験と上原良司—」平成27年7月25日(土)～9月15日(火)(長野県立歴史館)
- ・「特別展 生誕140年松永安左エ門」平成27年9月1日(火)～9月27日(日)(小田原・松永記念館)
- ・「日独修好150年の歴史 国際都市・長崎からみたドイツ ～もうひとつの交流史～」2015年9月19日(土)～11月29日(日)※(展示期間は10月21日～11月29日)(長崎歴史文化博物館)

■ 広報動画の作成

大学部開設125年を機に、DMC研究センターの協力のもと、義塾の広報動画を作成した。当初、塾長・理事らのハーバード大学訪問に際して作成された動画の内容をさらに拡張し、福沢諭吉と慶應義塾の創立、闘う福沢諭吉、福沢諭吉の女性観と題する3本の動画にした。義塾の歴史や成り立ち、福沢の生涯とその思想を、海外を含め多くの方々を対象にまとめている(言語は英語、日本語・英語の字幕あり)。

<http://www.keio.ac.jp/ja/news/2015/osa3qr00000125st.html>

■ 通信教育部への協力

通信教育部の依頼を受け、慶應義塾にゆかりのある場所、人物、できごとを都道府県別に紹介する記事を逐次提供している。詳細は下記URL。

<http://www.tsushin.keio.ac.jp/relation/>

■ 資料の燻蒸

今年度も夏季一斉休暇中に資料の燻蒸を実施した(8月8～16日)。

福沢研究センター諸記録 (2015年4月～2015年9月)

■ 諸会議

- *平成27年度執行委員会 (4月22日、6月3日、8月25日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第4巻編集委員会 (4月22日)
- *平成27年度第1回福沢研究センター会議 (6月10日)
- *平成27年度第1回運営委員会 (7月1日)
- *小泉基金運営委員会 (7月21日)
- *『近代日本研究』第32巻編集委員会 (8月25日、9月30日)

■ 人事

- | | | | |
|--------|----|--------------|--------|
| 〈顧問〉 | 新任 | 小室正紀 (名誉教授) | 7月1日～ |
| 〈所員〉 | 新任 | 斎藤秀彦 (横浜初等部) | 4月1日～ |
| 〈客員所員〉 | 退任 | 掛川トミ子氏 (関西大) | ～3月31日 |
| 〈事務局〉 | 新任 | 池ヶ谷麻衣 (事務嘱託) | 4月1日～ |
| | 新任 | 松岡莉奈 (非常勤嘱託) | 5月1日～ |

■ 主な来往

以下、戦争プロジェクトに関連する聞き取り調査には (聞) を付す。

- *福岡正夫名誉教授来訪 (聞) (4月16日)
- *延世大学鄭用書氏ほか、留学生調査のため来訪 (4月24日)
- *近藤久男氏、英字新聞、三田キヤムパスを寄贈 (5月7日)
- *亀井源太郎氏、祖父常蔵氏旧蔵資料を寄贈 (5月13日)
- *南開大学日本研究所大学院生周曉霞氏来訪 (5月21日、8月28日)
- *光藤裕子氏、叔父浅沼朗氏旧蔵資料を寄贈 (5月25日)
- *藪納壽氏、小泉信三直筆原稿を寄贈 (5月25日)
- *細貝哲也氏来訪 (6月3日、9月24日)
- *林信行氏、尊父茂美氏旧蔵資料を来訪 (6月3日)
- *昭和女子大学堀内正昭教授ほか、演説館調査のため来訪 (6月4日、7月9日、16日、24日、9月14日)
- *宮崎英子氏、兄河本文彦氏旧蔵資料を寄贈 (6月5日)
- *安井裕二郎氏来訪 (6月8日)
- *円覚寺殿谷師、中西師、丸山師、展示相談のため来訪 (6月9日)
- *那須備述氏来訪 (聞) (6月11日)
- *東京大学田中純教授、資料閲覧のため来訪 (6月12日)
- *森口幸雄氏来訪 (聞) (6月15日)
- *春日祐幸氏、藤原工業大学アルバムほかを寄贈 (聞) (6月17日)
- *名古屋大学山口庸子氏、資料閲覧のため来訪 (6月19日)
- *磯貝三枝子氏、幼稚園関係資料を寄贈 (6月24日)
- *長野県立歴史館への貸出 (6月25日) 返却 (9月24日) 対応
- *田崎久子氏、兄篠崎俊二氏関係資料を寄贈 (7月2日)
- *武山芳子氏、父二郎氏、祖父良次氏の資料を寄贈 (7月3日)
- *赤塚美希子氏、尊父深柄光勇氏旧蔵資料を寄贈 (7月6日)
- *杉山謙二郎氏、資料を寄贈 (7月7日)
- *吉田泰子氏、尊父山本庫造氏旧蔵資料 (アルバム) を寄贈 (7月16日)
- *岸崎昌博氏、尊父泰氏旧蔵寄宿舍アルバムを寄贈 (7月21日)
- *伊藤公平教授、加藤武文氏来訪、加藤武男氏旧蔵書幅を寄贈 (7月21日)
- *医学部阿部雄志君、医学部体育会弓道部日誌を寄贈 (7月24日)
- *麻生英臣氏、戦争関連資料を寄贈 (7月27日)
- *富沢正明氏、尊父正一氏旧蔵アルバムほかを寄贈 (7月28日)
- *森田優子氏、曾祖父栗田宗次 (治) 氏旧蔵卒業生写真を寄贈 (7月29日)
- *三橋信吾氏、尊父茂氏旧蔵卒業アルバムを寄贈 (8月5日)
- *山田健二氏、叔父山田大一氏関係資料を寄贈 (8月6日)
- *松永記念館への貸出対応 (8月18日)
- *東京大学田中純教授、明治大学飛矢崎貴規氏、資料閲覧のため来訪 (8月26日、27日、9月28日)
- *インド・デリー大学バンダ・ナビン・クマール氏、資料閲覧のため来訪 (8月28日)
- *長崎歴史文化博物館への貸出対応 (9月8日)
- *山名愛三氏、資料を寄贈 (9月24日)

■ 出張・見学

- *都倉、資料返却・受取のため小俣嘉男氏宅を訪問 (4月13日)
- *都倉、内田駒子氏を訪問 (聞) (4月16日)
- *都倉、大阪医史学会に出席 (4月25～26日)
- *都倉、石川忠氏を訪問 (聞) (4月27日)

- *都倉、三村亮平氏を訪問 (聞) (4月28日)
- *西沢、旧邸保存会評議員会、山崎家調査のため中津 (5月13～14日)
- *都倉、横山、上原家調査、渡辺光敏氏 (聞) のため長野 (5月18～19日)
- *酒井、竹屋、全国大学史資料協議会東日本部会総会に出席 (6月3日)
- *西沢、明治維新史学会第45回大会のため宇和島 (6月12～14日)
- *西沢、福沢書簡閲覧のため、日吉で築氏と面会 (7月4日)
- *井奥、三科、坂井顧問宅を訪問 (中井信彦氏旧蔵資料受取) (7月15日)
- *西沢、延世大学、梨花女子大学を訪問 (7月16～18日)
- *西沢、調査員、研修生、宮内公文書館見学 (7月23日)
- *都倉、石田、横山、信濃町で医学部資料調査 (8月3日)
- *都倉、上原家調査ほか (松代、千曲、松本) (8月13～15日)
- *西沢、塩路眞昭氏、渡辺和義氏と面会 (8月18日)
- *都倉、松本浅子氏宅訪問 (兄吉田兼次郎氏遺品寄贈) (9月29日)
- *都倉、横山、資料返却のため安曇野 (9月26～27日)

■ 講師派遣

- *西沢、信濃町地区専任職員 (新任者) オリエンテーションで講義:「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
- *都倉、信濃町研修医・専修医の新任者オリエンテーションで講義:「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
- *西沢、中等部で授業:「一身独立と独立自尊」(4月10日)
- *都倉、SDM 合宿で講義:「福沢諭吉と「私立」の精神」(4月11日)
- *都倉、船橋三田会福沢精神研究会で講演:「『学問のすすめ』と福沢諭吉の精神」(4月18日)
- *都倉、文学部「博物館学実習」で講義:「慶應義塾における歴史編纂と福沢研究センター」(5月1日)
- *都倉、SFC「慶應義塾入門」で講義:「戦時の塾生と慶應義塾」(6月5日)
- *都倉、福沢記念文明塾で講演:「多事争論とは何か」(6月6日)
- *都倉、港区戦後70年記念事業で平和記念誌研修 (6月14日)
- *都倉、文学部「民族考古学研究法Ⅰ、Ⅲ」で講義:「慶應義塾と戦争」を巡って (6月15日)
- *都倉、SFC 中等部で講義:「創立者・福沢諭吉に何を学ぶか」(6月25日)
- *都倉、BGF ジャパンで講義:「福沢諭吉のイメージと実像」(6月27日)
- *小室顧問、三田演説会で講演:「福沢諭吉と資本主義―『実業論』以降の経済思想を中心として―」(7月3日)
- *都倉、全国議員三田会で講演:「慶應義塾と戦争」を巡って (7月6日)
- *西沢、延世大学「韓国学と世界フォーラム」で発表:「慶應義塾朝鮮留学生の留学生生活及び留学後一日本人学生と比較して―」(7月17日)
- *都倉、港区教員研修で講義:「戦時下の大学と戦争」(7月27日)
- *都倉、自分史フェスティバル2015で講演:「戦争の時代をアーカイブ化する」(8月7日)
- *西沢、八女学院高校で講義:「福沢諭吉の生涯について」(8月24日)
- *西沢、北京理工大学で集中講義 (全4回):「近代日本と福沢諭吉」「人間交際のネットワーク」「福沢諭吉の近代社会論」「福沢諭吉の女性論」(8月30日～9月11日)
- *都倉、神田ロータリークラブで講演:「学徒出陣の実像」(9月3日)
- *都倉、長野慶友会で講演:「福沢諭吉入門」(9月6日)
- *都倉、印刷三田会で講演:「福沢諭吉と印刷、そして躬行実践」(9月15日)
- * (商) 梅津所員、SDM 入学合宿にて講義:「福沢学」(9月19日)
- *都倉、昭和19年三田会で座談会:「日本の現状」(9月24日)

■ その他

- *設置講座ガイダンス:三田 (4月2日)、日吉 (4月6日)
- *三田東館から日吉西別館へ資料移動 (6月5日)
- *鶴見大学教授金文京氏による講義:「朝鮮の文書の読み方について」(9月25日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第23号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2015年10月31日 (年2回刊)

編集
発行 慶應義塾福沢研究センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印刷 (有) 梅沢印刷所